

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 D精神保健福祉士はカンファレンスにおいて、Eさん(30歳)の退院を検討するために、今後、利用可能な社会資源に関連する情報をホワイトボードに図示して説明した。Eさんは、自宅への退院に備えて宿泊型自立訓練の体験をしていた。その一方、父親との折り合いが悪いことから、Eさんは以前に支援を受けていた市の保健師にも相談し、グループホームの見学も行った。また、日中については、友人のいるコンビニエンスストアで働くか、就労プログラムを実施している就労移行支援事業所又は精神科デイケアの利用を考えている。

次のうち、D精神保健福祉士がカンファレンスでの説明において、情報を図示したツールとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 エコマップ
- 2 ファミリーマップ
- 3 ジェノグラム
- 4 ソシオグラム
- 5 タイムライン

問題 22 次の記述のうち、ソーシャルワークの原理に基づく実践として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 ホームレスに至った原因を特定するため、環境要因よりも個人要因を重視し分析する。
- 2 住民との協働による、課題の早期発見や見守りを推し進め、事前対応型の予防的支援を展開する。
- 3 多機関に所属する専門職からなるチームを統括し、クライアントの生活を総合的かつ包括的に援助するように指揮する。
- 4 セルフネグレクトの状態にあり、援助を拒む住民には、相談窓口に来所するよう強く働きかける。
- 5 地域の福祉ニーズを的確に把握し、必要なサービスが不足している場合にはそれらを創出する。

問題 23 次の記述のうち、ソーシャルワークの実践モデルとして、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 環境との相互作用に焦点を当て、適応状態を捉えるモデルを治療モデルという。
- 2 クライアントが語る物語に着目し、問題を定義するモデルを医学モデルという。
- 3 問題の原因を個人の病理現象から見いだし、それを取り除くことにより解決するモデルを生活モデルという。
- 4 クライアントの肯定的態度や能力に着目し、主観性を尊重するモデルをストレングスモデルという。
- 5 蓄積された統計データを用いて、問題の原因を特定するモデルをナラティブモデルという。

問題 24 次の記述のうち、精神保健福祉士が行う地域生活支援として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 通院中のクライアントに、服薬は自己管理ではなく親に委ねるよう指導した。
- 2 通院中のクライアントに自炊を始めたいと相談され、社会復帰プログラムのある病院への入院を勧めた。
- 3 企業への就職を希望するクライアントに、就労継続支援B型事業所を紹介した。
- 4 闘病体験を同じ病を抱えた人に役立てたいクライアントに、ピアサポート活動を紹介した。
- 5 一人暮らしを希望するクライアントに、経済的なめどが立ってから相談を開始すると伝えた。

問題 25 次の記述のうち、精神保健福祉士のバーンアウトを表す状況として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 初めてクライアントの家を訪問し、その生活実態を目の当たりにして、仕事を続けていく自信が揺らいだ。
- 2 就職後、デスクワークが多く、思っていたほどクライアントと向き合う時間を確保することができなかった。
- 3 同期の精神保健福祉士がクライアントとすぐに打ち解けている姿を見て、自信を失った。
- 4 入職1年目の精神保健福祉士が、アルコール依存症のクライアントの再飲酒、再入院に直面し、無力感を抱いた。
- 5 長期間、複数のクライアントの困難な状況に対応していたが、相次ぐクライアントの入院によって疲労困憊こんぱいになった。

問題 26 次の記述のうち、精神保健福祉に関わる専門職等の役割について、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 退院後生活環境相談員は、包括型地域生活支援プログラム(ACT)で訪問を行う。
- 2 生活保護現業員は、リワークプログラムにおいて就労に関するアセスメントを行う。
- 3 社会復帰調整官は、精神障害者保健福祉手帳の交付の判定を行う。
- 4 精神保健福祉相談員は、精神科デイ・ケアで集団生活への適応訓練を行う。
- 5 精神障害者雇用トータルサポーターは、職場実習先の開拓及び実施のための事業所への助言や調整を行う。

問題 27 就労移行支援事業を利用していたFさんは、運送会社の配送準備業務に従事し3週間が経過した。ある日、仕事帰りに事業所に立ち寄り、担当であるG精神保健福祉士に、「ミスしないようにと考えすぎなのか緊張が続き、疲れが取れません。これからも頑張っていきますが、紙に書いて丁寧に指示するという就職前の約束が実行されないので、困っています」と話した。G精神保健福祉士は話を整理し、「私の方から人事担当者に改めて話します」と答えた。

次のうち、G精神保健福祉士の対応の基となる考え方として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 社会モデル
- 2 クラブハウスモデル
- 3 社会的目標モデル
- 4 医療モデル
- 5 相互作用モデル

問題 28 次のうち、精神保健福祉士が、守秘義務よりも第三者への情報提供を優先する場合として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 外部の専門家からスーパービジョンを受ける場合
- 2 家族から、クライアントが面接中に話した内容を教えてほしいと依頼された場合
- 3 児童虐待を受けたと思われる児童を発見した場合
- 4 施設従事者による障害者虐待を受けたと思われる障害者を発見した場合
- 5 外部の人から、クライアントの病名を尋ねられた場合

問題 29 次の記述のうち、精神保健福祉士が行う精神障害のあるクライアントへの援助の方針として、**適切なものを1つ**選びなさい。

- 1 がんの治療を受けている親と二人で暮らすクライアントに、就労移行支援事業所の利用は控えることを提案する。
- 2 通院しながら子育てをするうつ病のクライアントに、ファミリー・サポート・センター事業の利用を提案する。
- 3 親を介護しながらアルコール依存症で通院するクライアントに、自助グループの利用をやめて介護に専念することを提案する。
- 4 グループホームに入居したクライアントに、これまで使っていた通所型サービスの中断を提案する。
- 5 障害福祉サービス事業所が判定する障害支援区分に応じたサービスを提案する。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 30 から問題 32 までについて答えなさい。

〔事 例〕

大規模自然災害が発生したN市保健所のH精神保健福祉士は、チームの一員として被災直後の被災地域の全戸訪問を行った。Jさん(22歳, 男性)の自宅を訪問したところ、父親から、「Jは、高校卒業後に勤めた会社を半年で心身の不調を訴え退職し、ここ数年は、近所へ買物に外出する以外は自室にて過ごすようになっていた。被災後からは近所の手伝いも率先して行い、表情も明るくなり、近所の人からも本当に助かっていると言われていた。また具合が悪くならなければよいが」とJさんを心配する話を聞いた。そこで、チーム内でJさんについての情報を共有し検討した結果、継続したフォローアップが必要であると判断され、H精神保健福祉士がJさんを担当することになった。(問題 30)

全戸訪問から8か月後、Jさんの父親が来所して面接することになった。面接で父親は、「Jは、手伝いをきっかけに紹介された仕事に就くことになり、家族みんなでもとても喜んだ」と話した。しかし、その後沈黙が続いたため、H精神保健福祉士が尋ねると、疲れ切った様子で、「実は3か月前からJの具合が急に悪くなって」と話し始めた。「Jは、元気に働き始めましたが、そのうち帰宅しても話もせず、すぐに自室に籠もってしまい顔を合わせないことが多くなりました。また、時折、自室から嗚咽おえつが聞こえてきたため心配して声をかけましたが、大丈夫だと返答するので、そっとしておきました。そして1か月前から、出勤時間になっても自室から出てこない日が続き、現在は欠勤が続いています。あなたから何回か訪問の提案をいただいていたのですが、いつもJは私たちに断れと言っていたんです」と語った。(問題 31)

父親の話を聞いたH精神保健福祉士は、Jさんの家族との面接を継続するだけでなく、Jさんに対して介入を行う必要性を感じた。(問題 32)

問題 30 次の記述のうち、この時点において、チームでJさんについての情報を共有し、継続したフォローアップが必要だと判断した理由として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 Jさんが、両親の期待に応えようとしていると考えられたため。
- 2 Jさんが、他者との関係を持つと調子を崩すと考えられたため。
- 3 Jさんが、経済的な困難を訴える可能性が考えられるため。
- 4 Jさんが、チームをまとめるリーダーになる可能性が考えられるため。
- 5 Jさんが、無理をして頑張っている状態だと考えられたため。

問題 31 次の記述のうち、この時点の面接におけるH精神保健福祉士のJさんの家族に対する支援として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 家族の自尊心を高めるために、これまでの対応を高く評価する。
- 2 家族の認知のゆがみを修正するように促す。
- 3 父親の話を受容する。
- 4 Jさんの病気や障害について説明をする。
- 5 Jさんの生活技能を向上させるための訓練を行うことを提案する。

問題 32 次の記述のうち、この時点でH精神保健福祉士が行う援助として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 Jさんの両親に、Jさんに宛てた手紙を渡してもらうようお願いする。
- 2 市内にある精神科クリニックの医師に、往診を依頼する。
- 3 精神保健福祉センターに、訪問を依頼する。
- 4 Jさんの様子を確認してもらうため、勤務先の上司に訪問を依頼する。
- 5 Jさんの両親に、一時的にJさんと離れて生活することを提案する。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

〔事 例〕

Kさん(39歳)は、夫のLさん(43歳)と小学生の子ども(9歳、女兒)の3人家族である。結婚して以来、Lさんは、Kさんの交友関係を絶たせ、最低限の食費のみを渡し、家計を細かく管理した。また、Lさんの思い通りに家事ができていないとKさんに殴る、蹴るなどの暴力を振るった。今回、Kさんを守ろうとした子どもにも暴力を振るったため、これを機にKさんは子どもを連れて家を離れ、福祉事務所を通じて母子生活支援施設に入所した。入所初期のKさんの話は混乱していたが、担当のM母子支援員(精神保健福祉士)は丁寧に対応し、「外から聞こえる足音が夫のような気がして怖い」「夫から離れたいけど無理かもしれない」「子育てのことも負担」ということを聞き取った。(問題 33)

施設でのKさんはLさんに強いられていた生活のルールを強迫的に守ろうとし、言うとおりにしないとLさんにされたように子どもを叱責した。また、職員や他の入居者の言動を被害的に捉えて、相手を攻撃することが多かった。曖昧な対応をする職員には、「いい加減なことを言わないでほしい」と強く責めたため、ケース会議でKさんのことを取り上げた。(問題 34)

Lさんは、A相談員(精神保健福祉士)が対応する市役所の男性相談窓口を訪れ、「暴力を振るっていた父のようになりたくなかった。理想の家庭を作りたくて、家事や育児も言うとおりにできない妻を導いてきたつもり。それなのに妻は子どもを連れて出て行った。妻だけでなく今回は子どもにも手を出してしまったので、自分でも変わらないといけないと思うが、どうしたらよいか分からない」と話した。A相談員は、「自分の行動についてなんとかしたいと思っているのですね。自分の行動を整理してみませんか」と伝えて、県内で開始されていたNPO法人が実施している事業・活動を紹介した。(問題 35)

問題 33 次のうち、この時点でM母子支援員が優先して取り組むKさんへの支援として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 地域生活に向けた就労先や住居の検討
- 2 生活費を請求するための弁護士の紹介
- 3 精神的安定を目的にした相談面接
- 4 学校や行政との関係者会議の開催
- 5 夫が訪ねてきた場合の安全体制の確保

問題 34 次の記述のうち、ケース会議で共有する支援の方向性として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 責められた職員のKさんへの態度を指摘し、自己覚知させる。
- 2 ト라우マの影響について学び直し、Kさんへの理解を深める。
- 3 Kさんの苦情について、画一化した対応マニュアルを作る。
- 4 施設生活にはなじめないなので、他の住まいを検討する。
- 5 境界性パーソナリティ障害と考え、精神科診療所への受診につなげる。

問題 35 次のうち、この時点でA相談員がLさんに紹介した事業・活動として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 DV加害者プログラム
- 2 リラクゼーション法
- 3 夫婦同席カウンセリング
- 4 イモーションズ・アノニマス(EA)
- 5 親支援プログラム